吉備国際大学研究紀要
（人文・社会科学系）
第28号，27－43，2018

大学生におけるアイデンティティ発達と学業・友人・家族機能との関連

―学生生活サイクルの視点から―

宇都宮　真輝

The Relationship among Identity Development, School Education, Best Friend, and Family Functioning in University Students
―From the viewpoint of the student life cycle―

Maki Utsunomiya

Abstract

The purpose of this study were to investigate the relationship among identity development, school education, best friend, and family functioning, and to compare the difference between the lower grades and the upper grades in university students. Participants were 170 students (the lower grades: 16 freshmen, 86 sophomores; the upper grades: 26 juniors, 42 seniors). The results revealed that (1) The family functioning was related to identity development (ideological identity and relational identity) in the lower grades, but not in the upper grades, (2) The lower grades committed and explored in depth for school education more than the upper grades, (3) Both grades were high in both commitment and deep exploration for best friend tend to be higher on identity (ideological identity and relational identity), (4) Both grades were high in both commitment and deep exploration for school education tend to be higher on relational identity than ideological identity. This result seems to be related with characteristics of identity development among Japanese.

Key words：university students, identity development, school education, best friend, family functioning
キーワード：大学生，アイデンティティ発達，学業，友人，家族機能

吉備国際大学心理学部
〒716-8508　岡山県高梁市伊賀町８
Kibi International Universit
8, Iga-machi, Takahashi, Okayama, Japan (*716-8508*)

問題と目的

青年期のアイデンティティ発達研究

Erikson（1950）は，青年期の発達課題としてアイデンティティの確立をあげた。また，Erikson（1959）はアイデンティティ（自我同一性）の感覚について，「内的な斉一性と連続性を維持しようとする各個人の能力と，他者に対する自己の意味の斉一性，連続性とが一致したときに生じる自信」であると述べた。つまりアイデンティティの感覚とは，主観的に認識している自分が，他者からみた自分と一致していることに対する自信であるといえる。

アイデンティティ形成を検討するアプローチとしては，これまでMarcia（1966）のアイデンティティ・ステイタス・アプローチが最も多く用いられてきた。しかし，その選択領域は職業・政治・宗教であり，男性に偏った領域であることが批判されるようになった（Bosma, 1992）。その後，女性のアイデンティティ発達における対人関係の領域に注目した研究（Marcia & Friedman, 1970 ; Grotevant, Thorbecke & Meyer, 1982 ; Archer, 1989 ; Josselson, 1994 ; 岡本, 1997など）も行われるようになった。宗田・岡本（2007）は，Josselson（1992，1994）の視点を応用した，「個」と「関係性」の両面からアイデンティティを捉える尺度を開発している。

また杉村（1998）は，近年，青年期の発達に関する研究領域の全般にわたり，社会的文脈の中でのアイデンティティ形成に対する関心が高まっていることを指摘した。さらに，青年は自分と同じ文脈に生きる家族や仲間，恋人，教師などの身近な他者と相互作用しながら，これらの他者によって示された，その文脈が規定する範囲の選択肢の中から職業やイデオロギーを選択していると述べた。また畑野・杉村（2014）は，Crocetti, Rubini & Meeuw（2008）が開発した，イデオロギー領域（中高大学生には教育，社会人には職業）と対人関係領域（主に，中高生には親友，大学生と社会人には親密な他者）における，コミットメント，深い探求，コミットメントの再考の程度を測定する，ユトレヒト版アイデンティティ・コミットメント・マネジメント尺度の日本版（Japanese version of the Utrecht-Management of Identity Commitment Scale ; U-MICSJ）も作成している。

青年期のアイデンティティと家族関係

青年期のアイデンティティ形成と親子関係との関連は先行研究からも明らかである。金子（1989）は，青年期の女子において，母親との心理的距離が遠いほど，アイデンティティ拡散感が強くなることを明らかにした。宗田・大澄・岡本（2011）は，青年期のアイデンティティ（「個」と「関係性」）と家族機能（「適応性」と「凝集性」），家族イメージとの関連を調査した。その結果，「個としてのアイデンティティ」と家族の役割やリーダーシップを表す「適応性」，「関係性にもとづくアイデンティティ」と家族の情緒的な結びつきを表す「凝集性」，内在化された他者像を示す「個体内関係性」とアイデンティティとの関連を示唆した。

また白石・岡本（2006）は，家族機能の特徴と大学生のアイデンティティ発達との関連を１年生と３年生を対象に調査し，家族における結びつきや役割の柔軟性が高い場合は，大学１年生において「個」と「関係性」のアイデンティティ得点が高くなることを明らかにした。一方，アイデンティティ形成がより進んでいるであろう３年生においては家族機能の特徴によるアイデンティティ形成の違いはみられなかった。

青年期のアイデンティティと学業・友人との関連

自我同一性は，ライフサイクルの各段階における重要な他者との関わりを通じて形成され，その対象が家族，仲間，パートナーへと移行する（Erikson,

1959)とされるが,青年期の友人関係がアイデンティティ形成の重要な要因であることは多くの研究からも明らかである（Orlofsky, Marcia & Lesser, 1973 ; Grotevant, Thorbecke & Meyer, 1982 ; Kox & Hustinx, 1990 ; Crocetti et al., 2008 ; 畑野ら, 2014)。

例えば宮下（1998）は，青年の友人関係のあり方とアイデンティティとの関連について，友人関係から「精神的な安らぎ･相互信頼」を得たり,「社会性」「社交性」を備えた友人を得ることが,アイデンティティ形成と関係していることを明らかにした。

また池田（2017）は，大学生が多様な友人関係を形成し，それに積極的に関与することが，大学内での活動や学習意欲に効果を及ぼすことを示唆した。田中（2007）は，大学生の学生相談事例から，学業の行き詰まりとアイデンティティの問い直しとの関連を示した。鶴田・杉村・津田・古橋・田中・李・加藤・船津・神村・小川・鈴木（2007）においても，学修支援の問題が，対人関係や心理的問題，家族関係，進路などにつながることが指摘されている。さらに，白石・岡本（2005）は，大学生における大学や学業に対する意欲低下とアイデンティティ発達との関連を指摘し，特に大学に対する意欲低下は，発達的問題との関連性がより強いことを示唆した。また，Watanabe & Uchiyama（2008）は，青年期のアイデンティティ発達における学業や友人への傾倒・探索の程度について日米大学生の比較を行い，アメリカの大学生のほうが学校の成績に価値をおき，学業への傾倒・探索の程度も高いことを明らかにした。

大学生における学年による心理的課題の変化

鶴田（2002）は，大学生を理解する際に学年の移行にともなう心理的課題の変化を軸とした「学生生活サイクル」の視点を提案した。大学生の入学から卒業までの期間を「学生期」(安藤, 1991）と呼ぶが,鶴田（2002）は，学生期を入学期（入学後１年間),中間期（２年生・３年生)，卒業期（卒業前１年間）に区分し，それぞれの時期の心理的特徴を明らかにした。入学期は，慣れ親しんだ環境から新しい課題や人間関係への移行，中間期は自分らしさの探究と対人関係の深まり，卒業期は社会生活への移行の準備や未解決の課題の整理,などが心理的特徴である。

また，白石・岡本（2006）は，大学１年生と３年生に対し，家族機能の特徴と大学生のアイデンティティ発達との関連を調査したが，家族機能がアイデンティティ発達にもたらず影響は１年生にのみみられた。加藤（1989）も,大学生におけるアイデンティティの発達は，１－２年次にくらべ，３－４年次前期にかけ，特に卒業期に顕著にみられることを明らかにしている。

本研究の目的

以上のように，青年期において友人関係や学業,また家族関係は，それぞれが関連しあいながらアイデンティティ発達に影響していることが示された。また，大学生においては，学年による心理的課題の変化により，その影響は異なることが考えられる。しかし，それらすべての要因とアイデンティティ発達との関連，さらに学年による違いを扱った研究はまだ少ない。

そこで，本研究では大学生における主なイデオロギー領域である学業，また対人関係領域で重要と思われる友人や家族関係が，アイデンティティ発達にどのような影響を与えているのかについて，学生生活サイクルの視点（本研究においては,学生期を１・２年生，３・４年生に分けた）から検討することを目的とした。また，アイデンティティ発達を「個」と「関係性（「個体内関係性」と「社会的関係性」)」の視点から捉えることも，本研究の特徴である。

方　法

対象者

大学生170名（男性90名，女性80名，平均年齢20.16歳，*SD*＝1.47）。１年生（16名），２年生（86名），３年生（26名），４年生（42名）。

時期：2014年７月～10月

質問紙

（１）フェイス項目：性別，年齢，学年，学科

（２）アイデンティティ尺度：宗田・岡本（2010）の「個としてのアイデンティティ」尺度および「関係性にもとづくアイデンティティ」尺度短縮版をそのまま使用した。「個としてのアイデンティティ（以後,「個」と省略）」尺度は，６下位尺度からなり,「関係性にもとづくアイデンティティ（以後,「関係性」と省略）」尺度は,「個体内関係性（母親などとの関わりから形成される内在化された他者像）」（２下位尺度),「社会的関係性（実際的な他者との関係）」（５下位尺度）からなる。各下位尺度は４項目ずつの全52項目からなり,「非常にあてはまる（７点）」～「全くあてはまらない（１点）」の７件法で回答を求め，合計点を各尺度得点とした。

Cronbachの α 係数は，アイデンティティ尺度全体で α = .92,「個」尺度は α = .93,「関係性」尺度は α = .85,「個体内関係性」は α = .67,「社会的関係性」は α = .84であった。また，平均値（標準偏差）は，アイデンティティ尺度全体で222.86（34.29),「個」尺度は99.35（23.02),「関係性」尺度は123.51（17.84),「個体内関係性」は29.85（5.98),「社会的関係性」は93.66（14.71）であった。

（３）家族機能測定尺度：草田・岡堂（1993）の家族機能測定尺度（適応性10項目，凝集性10項目）を使用した。「いつもある（５点）」～「まったくない（１点）」の５件法で回答を求め，合計点を各尺度得点とした。

（４）U-GIDS（Kox et al., 1990）の邦訳版（傾倒８項目，探索５項目）にて「学業」と「友人（親友）」の２領域を測定した。「全くそうだ（５点）」～「全くちがう（１点）」の５件法で回答を求め，平均値を各尺度得点とした。邦訳版は，渡辺・内山（2011）で用いられたものを許可を得て使用し，文章は調査対象者が理解しやすいように一部改編して用いた。

実施方法：講義時間内を利用して実施した。実施にあたっては，回答内容は集団データとして扱うことや，個人情報や回答内容が特定されることはないことを教示し，倫理的配慮を行った。

結　果

因子分析および信頼性の検討

（１）家族機能測定尺度の因子分析

全20項目について，因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行った。その結果，因子負荷量が.30に満たない項目18と20を削除し，最終的に１因子（18項目）が抽出された。累積寄与率32.63％，Cronbachの α 係数は.90であった。本研究では，これを「家族機能」因子と命名し，平均値±0.75*SD*で群分け（高・中・低）して分析を行った。なお，平均値（標準偏差）は，53.72（11.70）であった。

（２）U-GIDSの因子分析

因子分析（主因子法・バリマックス回転）の結果，学業および友人関係において各３因子が抽出された。因子分析結果を，畑野・杉村（2014）の作成したユトレヒト版アイデンティティ・コミットメント・マネジメント尺度の日本版（Japanese version of the Utrecht-Management of Identity Commitment Scale；U-MICSJ）と照らし合わせたところ，日本語訳には多少の違いがあるものの，各質問項目の意味内容および因子構造（項目順序は異なる）は同じであったことから,「コミットメント（５項目）：その領域について行った選択や，そこから引き出され

る自信」「深い探求（５項目）：現在のコミットメントについての熟考や情報収集, 他者と話す程度」「コミットメントの再考（３項目）：現在のコミットメントを放棄したり，新たなコミットメントを求めること」とした。各Cronbachの α 係数は.72～.90であった。平均値（標準偏差）は，学業における「コミットメント」は2.99（0.84）,「深い探求」は3.08（0.78）,「コミットメントの再考」は3.41（0.92）であった。また, 友人における「コミットメント」は3.46（0.78）,「深い探求」は3.30（0.74）,「コミットメントの再考」は3.62（0.93）であった。本研究では，これを各平均値±0.75*SD*で群分け（高･中･低）し，分析を行った（Table 1，Table 2）。

学年差の検討

各尺度について, 学年差（１・２年生と３・４年生）を検討するため *t* 検定を行ったところ，家族機能（t（168）= 2.05, p < .05）において１・２年生のほうが得点が有意に高かった。また，U-GIDSについては, 学業における「コミットメント」（t（168）= 1.73, p < .10）,「深い探求」（t（168）= 1.89, p < .10）において，１・２年生のほうが得点が有意に高い傾向がみられた。アイデンティティ尺度については,「個」の合計得点（t（168）= 1.88, p < .10）およびアイデンティティ尺度総得点（t（168）= 1.76, p < .10）において，３・４年生のほうが得点が有意に高い傾向がみられた（Table 3）。

学年別による各尺度の相関分析

まず，各学年群（１・２年生と３・４年生）において家族機能とアイデンティティ発達との関連をみるため，相関分析を行った（Table 4）。その結果，１・２年生においては, 家族機能尺度とアイデンティティ尺度全体および各下位尺度との間すべてに，有意な正の相関がみられた（r =.32 ～ .44, p<.01）。一方，３・４年生においては，家族機能尺度とアイデンティティ尺度全体と「関係性」尺度，関係性下位尺度の「社会的関係性」尺度との間にのみ，有意な正の相関がみられた（r =.24 ～ .27, p<.05）。

次に，各学年群において家族機能と学業，友人との関連をみるため相関分析を行った。その結果，１・２年生においては，家族機能尺度とU-GIDSの各下位尺度との間に，学業における「コミットメントの再考」を除き，有意な正の相関がみられた（学業：コミットメントはr =.34, p<.01，深い探求はr =.21, p<.05，友人：コミットメントはr =.42, p<.01，深い探求はr =.23, p<.05, コミットメントの再考はr =.26, p<.01）。一方，３・４年生においては，家族機能尺度とU-GIDSの各下位尺度との間に，有意な相関はみられなかった（Table 5）。

さらに，各学年群において学業，友人とアイデンティティ発達との関連をみるため，相関分析を行った。その結果，１・２年生においては, U-GIDSの「学業」各下位尺度とアイデンティティ尺度全体および各下位尺度との間のほとんどに有意な正の相関がみられた（r =.20 ～ .63, p<.01 ～ .05）。また，U-GIDSの「友人」各下位尺度とアイデンティティ尺度全体および各下位尺度との間には,「友人」下位尺度の「コミットメント再考」と「深い探求」の一部を除き，有意な正の相関がみられた（r =.29 ～ .50, p<.01）。一方，３・４年生においては，U-GIDSの「学業」各下位尺度とアイデンティティ尺度全体および各下位尺度の間の約半分に，有意な正の相関がみられた（r =.29 ～ .50, p<.01 ～ .05）。また, U-GIDSの「友人」各下位尺度とアイデンティティ尺度全体および各下位尺度との間にも，友人下位尺度の「コミットメント」にのみ有意な正の相関がみられた（r =.38 ～ .56, p<.01）。結果はTable 6に示す。

最後に，各学年群において学業，友人との関連をみるため，相関分析を行った。その結果，１・２年生においては, U-GIDSの「学業」下位尺度の「コミットメント」「深い探求」と「友人」下位尺度の「コミッ

Table 1　U-GIDS（学業）についての因子分析結果（*N*＝170）

No.	項目内容	第1因子	第2因子	第3因子
コミットメント（α＝. 90）				
3．	学業のおかげで，私は自分自身に確信が持てる。	.88		
1．	学業のおかげで，人生に安心感を持てる。	.85		
2．	学業のおかげで，自信が持てる。	.83		
5．	学業のおかげで，私は将来を楽観的に捉えることができる。	.79		
4．	学業は，将来における安心感を与えてくれる。	.76		
深い探求（α＝. 75）				
7．	私は自分の学業について思いをめぐらせることが多い。		.81	
8．	私は学業について多くの新しいことを知ろうと，とても努力している。		.75	
6．	私は学業について，多くのことを知りたい。		.71	
9．	私はしばしば他人が私の学業についてどう思っているか知りたいと思う。		.63	
10．	私はしばしば自分の学業について他の人と話をする。		.55	
コミットメントの再考（α＝. 74）				
*11．	私はしばしば他の学業を見つけたほうが賢明だろうと思う。			.87
*12．	私はしばしば違う学業の方が自分の人生を面白いものにしてくれるだろうと思う。			.82
*13．	実際，私は新たな学業を探している。			.69

* は逆転項目

Table 2　U-GIDS（友人）についての因子分析結果（*N*＝170）

No.	項目内容	第1因子	第2因子	第3因子
コミットメント（α＝. 89）				
2．	親しい友人のおかげで，自信が持てる。	.87		
3．	親しい友人のおかげで，私は自分自身に確信が持てる。	.87		
1．	親しい友人のおかげで，人生に安心感を持てる。	.84		
4．	親しい友人は，将来における安心感を与えてくれる。	.80		
5．	親しい友人のおかげで，私は将来を楽観的に捉えることができる。	.73		
深い探求（α＝. 77）				
8．	私は親しい友人について多くの新しいことを知ろうと，とても努力している。		.84	
7．	私は親しい友人について思いをめぐらせることが多い。		.79	
6．	私は親しい友人について，多くのことを知りたい。		.78	
9．	私はしばしば他人が私の親しい友人についてどう思っているか知りたいと思う。		.59	
10．	私はしばしば自分の親しい友人について他の人と話をする。		.41	
コミットメントの再考（α＝. 72）				
*11．	私はしばしば他の親しい友人を見つけたほうが賢明だろうと思う。			.82
*12．	私はしばしば違う親しい友人の方が自分の人生を面白いものにしてくれるだろうと思う。			.80
*13．	実際，私は新たな親しい友人を探している。			.74

* は逆転項目

Table 3　各尺度得点の学年差（1・2年生と3・4年生）

		1・2年生（*N* = 102）		3・4年生（*N* = 68）		*t*値
		平均	*SD*	平均	*SD*	
家族機能		55.21	11.99	51.49	10.94	2.05*
学業	コミットメント	3.08	0.80	2.85	0.90	0.09†
	深い探求	3.17	0.82	2.94	0.71	0.06†
	コミットメントの再考	3.40	0.94	3.43	0.89	0.80
友人	コミットメント	3.40	0.77	3.54	0.80	0.27
	深い探求	3.35	0.76	3.21	0.72	0.22
	コミットメントの再考	3.64	0.94	3.59	0.93	0.73
「個としてのアイデンティティ」	「個」合計得点	96.5	19.76	103.62	26.78	1.88†
「関係性としてのアイデンティティ」	「個体内関係性」	29.67	5.43	30.13	6.75	0.50
	「社会的関係性」	92.94	15.68	94.74	13.16	0.78
	「関係性」合計得点	122.61	18.52	124.87	16.82	0.81
アイデンティティ尺度総得点		219.11	31.65	228.49	37.44	1.76†

†*p*<. 10，**p*<.05

Table 4　学年別による家族機能尺度とアイデンティティ尺度の相関

		アイデンティティ全体	個合計	関係性合計	個体内関係性	社会的関係性
家族機能	1・2年生	.44**	.32**	.41**	.42**	.34**
	3・4年生	.27**	.22	.24*	.12	.25*

*p<.05, **p<.01

Table 5　学年別による家族機能尺度とU-GIDSの相関

		学業			友人		
		コミットメント	深い探求	コミットメントの再考	コミットメント	深い探求	コミットメントの再考
家族機能	1・2年生	.34**	.21*	.08	.42**	.23*	.26**
	3・4年生	.18	.02	.15	.16	.15	.06

*p<.05, **p<.01

Table 6　U-GIDSとアイデンティティ尺度の相関（1・2年生と3・4年生）

		アイデンティティ全体	個	関係性	個体内関係性	社会的関係性
学業	コミットメント	.46**／.34**	.35**／.24	.41**／.37**	.43**／.50**	.33**／.22
	深い探求	.47**／.09	.18／-.06	.61**／.29*	.26**／.04	.63**／.35**
	コミットメントの再考	.23*／.31*	.24*／.29*	.13／.23	.20*／.12	.09／.24
友人	コミットメント	.45**／ .52**	.29**／.38**	.46**／.56**	.35**／.50**	.43**／.45**
	深い探求	.31**／.13	.03／.05	.50**／.22	.29**／.14	.49**／.20
	コミットメントの再考	.13／.09	.17／.16	.04／-.05	.17／-.06	-.01／-.03

*p<.05, **p<.01　　表中の表記は（左：1・2年生／右：3・4年生）

Table 7　学年別（1・2年生と3・4年生）によるU-GIDSの相関

		学業			友人		
		コミットメント	深い探求	コミットメントの再考	コミットメント	深い探求	コミットメントの再考
学業	コミットメント	—	.40**	.33**	.47**	.23*	.01
	深い探求	.37**	—	-.03	.41**	.35**	-.18
	コミットメントの再考	.14	.01	—	.00	-.09	.25*
友人	コミットメント	.46**	.13	.27*	—	.35 **	-.07
	深い探求	0.16	.33**	.04	.31**	—	-.25*
	コミットメントの再考	-.25*	-.29*	.07	-.10	-.41**	—

*p<.05, **p<.01　　表中右上が1・2年生，左下が3・4年生

トメント」「深い探求」との間に有意な正の相関がみられた（r =.23 ～ .47, p<.01 ～ .05）。また,「学業」下位尺度の「コミットメントの再考」と「友人」下位尺度の「コミットメントの再考」との間にも有意な正の相関がみられた（r =.25, p<.05）。一方，３・４年生においては, U-GIDSの「学業」下位尺度の「コミットメント」と「友人」下位尺度の「コミットメント」との間に有意な正の相関（r =.46, p<.01),「友人」下位尺度の「コミットメントの再考」との間に有意な負の相関（r =－.25, p<.05）がみられた。また,「学業」下位尺度の「深い探求」と「友人」下位尺度の「深い探求」との間に有意な正の相関（r =.33, p<.01),「友人」下位尺度の「コミットメントの再考」との間に有意な負の相関（r =－.29, p<.05）がみられた。さらに,「学業」下位尺度の「コミットメントの再考」と「友人」下位尺度の「コミットメント」との間に有意な正の相関がみられた（r =.27, p<.05）。結果はTable 7に示す。

学年別による家族機能とアイデンティティとの関連（分散分析）

各学年群（１・２年生と３・４年生）における，家族機能（高・中・低）とアイデンティティ発達との関連をみるため１要因分散分析を行った。その結果，１・２年生では，家族機能の程度（高・中・低）により，すべてのアイデンティティ尺度得点に有意な差がみられた。アイデンティティ尺度総得点（F（2,99）=6.84, p<.01),「個」合計得点（F（2,99）= 4.05, p<.05),「関係性」合計得点（F（2,99）= 4.98, p<.01)，関係性下位尺度の「個体内関係性」（F（2,99）=6.25, p<.01),「社会的関係性」（F（2,99）= 3.14, p<.05)。多重比較（*Tukey*の*HSD*法）の結果，家族機能得点が高いほど各アイデンティティ得点が高いことが示された（Table 8)。一方，３・４年生では有意な差はみられず，家族機能によるアイデンティティ発達への影響は，１・２年生にのみ示された（Table 9)。

学年別による学業・友人とアイデンティティとの関連（分散分析）

（１）学業

各学年群（１・２年生と３・４年生）における，学業への「コミットメント」「深い探求」「コミットメントの再考」の程度（高・中・低）と，アイデンティティ発達との関連をみるため，１要因分散分析を行った。

①コミットメントとアイデンティティとの関連

１・２年生では，学業へのコミットメントの程度（高・中・低）により，すべてのアイデンティティ尺度得点に有意な差がみられた。アイデンティティ尺度総得点（F（2, 99）=10.18, p<.001),「個」合計得点（F（2, 99）=4.38, p<.05),「関係性」合計得点（F（2, 99）=9.52, p<.001)，関係性下位尺度の「個体内関係性」（F（2, 99）=10.40, p<.001),「社会的関係性」（F（2, 99）=6.06, p<.01)。多重比較（*Tukey*の*HSD*法）の結果，コミットメントの得点が高いほどアイデンティティ得点が高いことが示された（Table 10)。一方，３・４年生ではコミットメントの程度（高・中・低）により，アイデンティティ尺度総得点（F（2, 65）=4.97, p<.05),「関係性」合計得点（F（2, 65）=6.15, p<.01)，関係性下位尺度の「個体内関係性」（F（2, 65）= 9.88, p<.001）にのみ有意な差がみられた。多重比較（*Tukey*の*HSD*法）の結果，コミットメントの得点が高いほどアイデンティティ得点が高いことが示された（Table 11)。

②深い探求とアイデンティティとの関連

１・２年生では，学業の深い探求の程度（高・中・低）により，アイデンティティ尺度総得点（F（2, 99）=14.68, p<.001),「関係性」合計得点（F（2, 99）=28.09, p<.001)，関係性下位尺度の「個体内関係性」（F（2, 99）=5.51, p<.01),「社会的関係性」（F

（2, 99）=28.06, p<.001）に有意な差がみられた。多重比較（*Tukey*の*HSD*法）の結果，深い探求の得点が高いほどアイデンティティ得点が高いことが示された（Table 12）。一方，３・４年生では深い探求の程度（高･中･低）により,「関係性」合計得点（F（2, 65）=3.53, p<.05）, 関係性下位尺度の「社会的関係性」（F（2, 65）=4.40, p<.05）にのみ有意な差がみられた。多重比較（*Tukey*の*HSD*法）の結果，深い探求の得点が高いほどアイデンティティ得点が高いことが示された（Table 13）。

③コミットメントの再考とアイデンティティとの関連

１・２年生では，学業へのコミットメントの再考の程度（高・中・低）により，アイデンティティ尺度総得点（F（2, 99）=3.75, p<.05）にのみ有意な差がみられた。多重比較（*Tukey*の*HSD*法）の結果，コミットメントの再考の得点が高いほどアイデンティティ得点が高いことが示された（Table 14）。３・４年生においても，コミットメントの再考の程度（高・中・低）により，アイデンティティ尺度総得点（F（2, 65）= 3.30, p<.05）にのみ有意な差がみられた。多重比較（*Tukey*の*HSD*法）の結果，コミットメントの再考の得点が高いほどアイデンティティ得点が高いことが示された（Table 15）。

（２）友人

各学年群（１・２年生と３・４年生）における，友人への「コミットメント」「深い探求」「コミットメントの再考」の程度（高・中・低）と，アイデンティティ発達との関連をみるため，１要因分散分析を行った。

①コミットメントとアイデンティティとの関連

１・２年生では，友人へのコミットメントの程度（高・中・低）により，すべてのアイデンティティ尺度得点に有意な差がみられた。アイデンティティ尺度総得点（F（2, 99）=11.09, p<.001），「個」合計得点（F(2, 99)=4.96, p<.01）,「関係性」合計得点（F(2, 99）=10.33, p<.001），関係性下位尺度の「個体内関係性」（F（2, 99）= 4.20, p<.05）,「社会的関係性」（F（2, 99）=9.09, p<.001）。多重比較（*Tukey*の*HSD*法）の結果，コミットメントの得点が高いほどアイデンティティ得点が高いことが示された（Table 16）。また３・４年生でも，コミットメントの程度（高・中・低）により，すべてのアイデンティティ尺度得点に有意な差がみられた。アイデンティティ尺度総得点（F（2, 65）=7.73, p<.01），「個」合計得点（F（2, 65）=3.74, p<.05），「関係性」合計得点（F（2, 65）=9.93, p<.001），関係性下位尺度の「個体内関係性」（F（2, 65）=7.24, p<.01），「社会的関係性」（F(2, 65)=6.34, p<.01）。多重比較（*Tukey*の*HSD*法）の結果，コミットメントの得点が高いほどアイデンティティ得点が高いことが示された（Table 17）。

②深い探求とアイデンティティとの関連

１・２年生では，友人への深い探求の程度（高・中・低）により，アイデンティティ尺度総得点（F（2, 99）=4.36, p<.05）,「関係性」合計得点（F（2, 99）=12.92, p<.001），関係性下位尺度の「個体内関係性」（F(2, 99) =3.92, p<.05）,「社会的関係性」（F(2, 99）= 12.92, p<.001）に有意な差がみられた。多重比較（*Tukey*の*HSD*法）の結果，深い探求の得点が高いほどアイデンティティ得点が高いことが示された（Table 18）。一方，３・４年生では有意な差はみられず，深い探求によるアイデンティティ発達への影響は，１・２年生にのみ示された（Table 19）。

③コミットメントの再考とアイデンティティとの関連

１・２年生および３・４年生においても，友人へのコミットメントの再考の程度（高・中・低）によるアイデンティティ尺度得点の有意な差はみられなかった。

Table 8　家族機能の程度別による各アイデンティティ得点の比較（1・2年生）

		家族機能（高群 N=29）	家族機能（中群 N=53）	家族機能（低群 N=20）	F値	多重比較
「個としてのアイデンティティ」	「個」合計得点	103.93 (16.19)	95.51 (18.23)	88.35 (24.96)	4.05*	高>低*
「関係性としてのアイデンティティ」	「個体内関係性」	31.76 (5.14)	29.74 (4.80)	26.45 (6.12)	6.25**	高>低**, 中>低*
	「社会的関係性」	98.31 (12.53)	92.08 (13.32)	87.45 (22.63)	3.14*	高>低*
	「関係性」合計得点	130.07 (15.71)	121.81 (15.04)	113.90 (25.96)	4.98**	高>低**
アイデンティティ尺度総得点		234.00 (23.66)	217.32 (26.65)	202.25 (43.69)	6.84**	高>中*，高>低**

( )内は標準偏差　*p<.05, **p<.01

Table 9　家族機能の程度別による各アイデンティティ得点の比較（3・4年生）

		家族機能（高群 N=9）	家族機能（中群 N=45）	家族機能（低群 N=14）	F値
「個としてのアイデンティティ」	「個」合計得点	111.89 (27.42)	106.09 (25.96)	90.36 (26.38)	2.44
「関係性としてのアイデンティティ」	「個体内関係性」	31.56 (4.22)	30.00 (7.35)	29.64 (6.27)	0.24
	「社会的関係性」	99.89 (13.20)	95.31 (14.05)	89.57 (8.33)	1.86
	「関係性」合計得点	131.44 (13.31)	125.31 (18.72)	119.21 (9.88)	1.52
アイデンティティ尺度総得点		243.33 (31.78)	231.40 (38.67)	209.57 (31.23)	2.77

( )内は標準偏差

Table 10　学業へのコミットメントの程度別による各アイデンティティ得点の比較（1･2年生）

		コミットメント（高群 N=20）	コミットメント（中群 N=67）	コミットメント（低群 N=15）	F値	多重比較
「個としてのアイデンティティ」	「個」合計得点	104.60 (19.97)	96.60 (18.51)	85.27 (20.79)	4.38*	高>低*
「関係性としてのアイデンティティ」	「個体内関係性」	33.10 (3.52)	29.61 (4.89)	25.33 (6.80)	10.40***	高>中*, 高>低*** 中>低**
	「社会的関係性」	100.15 (11.35)	93.15 (13.72)	82.40 (22.76)	6.06**	高>低**, 中>低*
	「関係性」合計得点	133.25 (11.84)	122.76 (16.46)	107.73 (24.66)	9.52***	高>中*, 高>低*** 中>低**
アイデンティティ尺度総得点		237.85 (23.31)	219.36 (29.28)	193.00 (34.85)	10.18***	高>中*, 高>低*** 中>低**

( )内は標準偏差　*p<.05, **p<.01, ***p<.001

Table 11　学業へのコミットメントの程度別による各アイデンティティ得点の比較（3･4年生）

		コミットメント（高群 N=13）	コミットメント（中群 N=38）	コミットメント（低群 N=17）	F値	多重比較
「個としてのアイデンティティ」	「個」合計得点	117.92 (23.46)	101.13 (23.28)	98.24 (33.56)	2.47	
「関係性としてのアイデンティティ」	「個体内関係性」	35.92 (6.80)	29.95 (5.04)	26.12 (7.26)	9.88***	高>中**, 高>低***
	「社会的関係性」	101.00 (14.83)	94.42 (13.05)	90.65 (10.81)	2.40	
	「関係性」合計得点	136.92 (19.83)	124.37 (14.91)	116.76 (13.67)	6.15**	高>中*, 高>低**
アイデンティティ尺度総得点		254.85 (36.55)	225.50 (33.57)	215.00 (38.52)	4.97*	高>中*, 高>低**

( )内は標準偏差　*p<.05, **p<.01, ***p<.001

Table 12　学業の深い探求の程度別による各アイデンティティ得点の比較（1・2年生）

		深い探求（高群 N=24）	深い探求（中群 N=61）	深い探求（低群 N=17）	F値	多重比較
「個としてのアイデンティティ」	「個」合計得点	100.42 (15.16)	97.31 (21.07)	88.06 (19.19)	2.12	
「関係性としてのアイデンティティ」	「個体内関係性」	31.75 (5.07)	29.79 (5.04)	26.29 (5.97)	5.51**	高>低**, 中>低*
	「社会的関係性」	103.33 (10.84)	94.21 (11.54)	73.71 (17.93)	28.06***	高>中*, 高>低*** 中>低***
	「関係性」合計得点	135.08 (11.02)	124.00 (14.33)	100.00 (20.91)	28.09***	高>中**, 高>低*** 中>低***
アイデンティティ尺度総得点		235.50 (21.71)	221.31 (28.59)	188.06 (33.66)	14.68***	高>低***, 中>低***

( )内は標準偏差　*p<.05, **p<.01, ***p<.001

Table 13　学業の深い探求の程度別による各アイデンティティ得点の比較（3・4年生）

		深い探求（高群 N=9）	深い探求（中群 N=40）	深い探求（低群 N=19）	F値	多重比較
「個としてのアイデンティティ」	「個」合計得点	104.44 (25.73)	100.05 (25.34)	110.74 (30.04)	1.03	
「関係性としてのアイデンティティ」	「個体内関係性」	32.89 (5.97)	28.63 (6.55)	32.00 (6.94)	2.60	
	「社会的関係性」	105.33 (16.12)	94.45 (12.14)	90.32 (11.54)	4.40*	高>低*
	「関係性」合計得点	138.22 (21.21)	123.08 (14.97)	122.32 (16.24)	3.53*	高>中*, 高>低*
アイデンティティ尺度総得点		242.67 (43.44)	223.13 (33.79)	233.05 (41.46)	1.20	

( )内は標準偏差　*p<.05

Table 14　学業へのコミットメント再考の程度別による各アイデンティティ得点の比較（1･2年生）

		再考（高群 N=22）	再考（中群 N=57）	再考（低群 N=23）	F値	多重比較
「個としてのアイデンティティ」	「個」合計得点	103.27 (23.08)	96.88 (19.41)	89.09 (14.89)	3.04	
「関係性としてのアイデンティティ」	「個体内関係性」	30.82 (5.70)	29.98 (5.30)	27.78 (5.27)	2.01	
	「社会的関係性」	97.45 (17.55)	92.58 (15.17)	89.52 (14.69)	1.49	
	「関係性」合計得点	128.27 (21.12)	122.56 (17.92)	117.30 (16.43)	2.01	
アイデンティティ尺度総得点		231.55 (37.73)	219.44 (30.95)	206.39 (21.83)	3.75*	高>低*

( )内は標準偏差　*p<.05

Table 15　学業へのコミットメント再考の程度別による各アイデンティティ得点の比較（3･4年生）

		再考（高群 N=13）	再考（中群 N=38）	再考（低群 N=17）	F値	多重比較
「個としてのアイデンティティ」	「個」合計得点	117.07 (30.62)	98.68 (24.74)	102.67 (24.83)	2.67	
「関係性としてのアイデンティティ」	「個体内関係性」	31.93 (9.27)	29.13 (5.83)	30.87 (5.95)	1.04	
	「社会的関係性」	100.20 (13.89)	93.08 (11.40)	93.47 (15.87)	1.70	
	「関係性」合計得点	132.13 (18.05)	122.21 (14.64)	124.33 (19.62)	1.94	
アイデンティティ尺度総得点		249.20 (41.22)	220.89 (33.93)	227.00 (36.72)	3.30*	高>中*

( )内は標準偏差　*p<.05

Table 16　友人へのコミットメントの程度別による各アイデンティティ得点の比較（1･2年生）

		コミットメント（高群 N=10）	コミットメント（中群 N=76）	コミットメント（低群 N=16）	F値	多重比較
「個としてのアイデンティティ」	「個」合計得点	99.80 (17.55)	98.96 (19.55)	82.75 (17.12)	4.96**	高>低†, 中>低**
「関係性としてのアイデンティティ」	「個体内関係性」	31.60 (4.79)	30.12 (5.15)	26.31 (6.07)	4.20*	高>低*, 中>低*
	「社会的関係性」	101.10 (8.05)	94.72 (13.99)	79.38 (19.50)	9.09***	高>低**, 中>低**
	「関係性」合計得点	132.70 (10.74)	124.84 (16.29)	105.69 (22.69)	10.33***	高>低***, 中>低***
アイデンティティ尺度総得点		232.50 (17.93)	223.80 (29.69)	188.44 (30.13)	11.09***	高>低**, 中>低***

( )内は標準偏差　*p<.05, **p<.01, ***p<.001

Table 17　友人へのコミットメントの程度別による各アイデンティティ得点の比較（3･4年生）

		コミットメント（高群 N=11）	コミットメント（中群 N=43）	コミットメント（低群 N=14）	F値	多重比較
「個としてのアイデンティティ」	「個」合計得点	121.27 (23.09)	102.44 (24.49)	93.36 (31.11)	3.74*	高>低*
「関係性としてのアイデンティティ」	「個体内関係性」	35.27 (4.43)	30.23 (6.72)	25.79 (5.56)	7.24**	高>中*, 高>低**
	「社会的関係性」	102.00 (13.53)	95.95 (12.45)	85.29 (10.29)	6.34**	高>低**, 中>低*
	「関係性」合計得点	137.27 (15.36)	126.19 (15.58)	111.07 (12.28)	9.93***	高>低***, 中>低**
アイデンティティ尺度総得点		258.55 (31.58)	228.63 (34.83)	204.43 (33.93)	7.73**	高>中*, 高>低**

( )内は標準偏差　*p<.05, **p<.01, ***p<.001

Table 18　友人の深い探求の程度別による各アイデンティティ得点の比較（1・2年生）

		深い探求（高群 N=25）	深い探求（中群 N=62）	深い探求（低群 N=15）	F値	多重比較
「個としてのアイデンティティ」	「個」合計得点	95.32 (17.11)	97.82 (19.33)	93.00 (25.77)	0.41	
「関係性としてのアイデンティティ」	「個体内関係性」	30.92 (5.26)	29.98 (5.26)	26.27 (5.43)	3.92*	高>低*, 中>低*
	「社会的関係性」	103.76 (12.40)	91.42 (13.06)	81.20 (19.99)	12.92***	高>中**, 高>低*** 中>低*
	「関係性」合計得点	134.68 (13.74)	121.40 (15.54)	107.47 (24.23)	12.92***	高>中**, 高>低*** 中>低*
アイデンティティ尺度総得点		230.00 (28.36)	219.23 (26.78)	200.47 (46.22)	4.36*	高>低*

Table 19　友人の深い探求の程度別による各アイデンティティ得点の比較（3･4年生）

		深い探求（高群 N=9）	深い探求（中群 N=45）	深い探求（低群 N=14）	F値
「個としてのアイデンティティ」	「個」合計得点	118.44 (26.89)	99.84 (26.21)	106.21 (26.81)	1.95
「関係性としてのアイデンティティ」	「個体内関係性」	32.89 (6.15)	29.44 (6.04)	30.57 (8.99)	1.02
	「社会的関係性」	101.56 (16.76)	94.16 (12.75)	92.21 (11.40)	1.53
	「関係性」合計得点	134.44 (22.22)	123.60 (15.82)	122.79 (15.25)	1.73
アイデンティティ尺度総得点		252.89 (38.60)	223.44 (35.47)	229.00 (39.34)	2.42

( )内は標準偏差

考　察

各尺度得点の学年による違い

各尺度得点の学年差をみると，家族機能，学業への「コミットメント」「深い探求」については１・２年生のほうが得点が高かった（Table 3）。また，３・４年生においては，アイデンティティ尺度総得点や「個」合計得点が高いことが示された。大学生が入学期から卒業期に向け，各時期の新たな心理的課題に取り組む中で成長していくこと（鶴田，2002），大学生におけるアイデンティティ発達は，３－４年次前期，特に卒業期に顕著にみられる（加藤，1989）ことは先行研究でも示されており，本研究においてもほぼ同様の結果が示されたといえる。

学年別による家族機能とアイデンティティ発達，学業・友人との関連

（１）家族機能とアイデンティティ発達との関連

家族機能尺度とアイデンティティ尺度との相関関係をみると，１・２年生においては家族機能が高いほど，すべてのアイデンティティ尺度の得点が高く，３・４年生においては家族機能が高い場合，アイデンティティ総得点と「関係性」得点のみが高くなっていた。また比較すると，１・２年生のほうが家族機能とアイデンティティとの相関関係は強いといえる（Table 4）。さらに，学年群ごとに家族機能の程度（高・中・低）によるアイデンティティ尺度得点の差をみると，１・２年生においては家族機能が高い者ほど，すべてのアイデンティティ尺度得点が高くなることが示された。一方，３・４年生においては，家族機能の高低によるアイデンティティ尺度得点の差はみられなかった（Table 8，Table 9）。

この結果から，大学生全体でみると，家族における結びつきや役割の柔軟性が高い場合，アイデンティティ発達は促進されるといえる。このことは，家族との結びつきの強さとアイデンティティ発達との関連について述べた金子（1989）や白石・岡本（2005）の結果を支持するものである。

一方，１・２年生においてのみ，家族における結びつきや役割の柔軟性が高いと，すべてのアイデンティティ尺度得点が高くなった。この点については，青年期は親から心理的に離れ，個を確立する時期（Blos, 1967）ではあるが，入学期にあたる１年生は慣れ親しんだ環境から新しい課題や人間関係に移行する時期であり（鶴田，2002），親からの心理的支えが「個」「関係性」両方のアイデンティティ発達を支えているからだと考えられる。またこの結果は，白石・岡本（2006）において家族機能がアイデンティティ発達にもたらす影響が，大学１年生にのみみられた結果を支持するものである。

（２）学業・友人とアイデンティティ発達との関連

相関分析および１要因分散分析の結果から，学業については，すべての学年において現在の学業による自信や安心がアイデンティティ発達全体を促進することが示された。しかし，３・４年生においては「個」のアイデンティティ発達は促進されず，特に関係性下位尺度の「個体内関係性（母親などとの関わりから形成されたもの）」が強く促進されることが示された（Table 6, 10，11）。また，学業についての深い探求は，1・2年生において，アイデンティティ発達全体を促進するが，特に「関係性」のアイデンティティ発達を強く促進することが示された。また，3・4年生においても「関係性」のアイデンティティ発達を促進することが示された（Table 4，10，11）。学業の再考については，両学年でアイデンティティ発達全体や「個」のアイデンティティ発達を促進することが示された。１年生においては，関係性下位尺度の「個体内関係性」も促進することが示された（Table 6，14，15）。

友人については，両学年群ともに現在の友人から得た強い自信や安心がある場合，アイデンティティ

発達は「個」「関係性」の両面から促進されるが，相対的にみて３・４年生のほうがより強くアイデンティティ発達を促進されることが示された（Table 6，16，17）。また，１・２年生においてのみ，友人への探求を深めることが,「個」のアイデンティティ発達を除く，すべてのアイデンティティ発達を促進することが示された（Table 6，18，19）。

これらの結果から，大学生において学業への自信や安心，深い探求はアイデンティティ発達全体を促進するが,「関係性」のアイデンティティ発達を促進する面が強く,「個」のアイデンティティ発達を特に促進しているわけではないことがわかる。このことは，Watanabe et al.（2008）における日米大学生の比較でも，日本の大学生はアメリカの大学生にくらべ学業への傾倒が低く，またそれによる達成感や肯定的感情も低い結果だったことなどからも，同様の傾向が示されたといえる。また鑪（1994）は，日本人の自我のアモルファス構造(自我が流動的で，自在に変化し，順応する液体のような状態）について，その特徴は対人関係の場での適応力には優れているが，自発的な行動を展開していくには困難をともなう点であることを指摘した。本研究においてもイデオロギー領域である学業が,「個」よりも「関係性」のアイデンティティを発達させており，鑪（1994）の指摘と同様，アイデンティティ発達には文化的な背景が影響することが示唆された。一方で，学業を再考することは,これまでの選択を振り返り，より自分自身の生き方を見つめる作業であり，両学年群ともに「個」のアイデンティティ発達を促進したと考えられる。また,学業による自信や安心が，３・４年生において「個」のアイデンティティ発達を促進しなかった点については，卒業後の進路選択（就職や進学）の要因が関係している可能性もある。

次に，大学生における友人関係への自信や安心，深い探求がアイデンティティ発達全体を促進した点については，青年期の友人関係がアイデンティティ形成の重要な要因である（Orlofsky et al., 1973 ; Grotevant et al., 1982 ; Kox et al., 1990 ; Crocetti et al., 2008 ; 畑野ら, 2014）ことを改めて支持したといえる。また，青年期は友人関係から「精神的な安らぎ･相互信頼」を得ており, 友人関係がアイデンティティ形成と関係している（宮下，1998）ことや，大学生が多様な友人関係を形成し，それに積極的に関与することが，大学内での活動や学習意欲に効果を及ぼす（池田，2017）こと，なども同様に支持したといえる。

さらに，Table 7からU-GIDSにおける友人と学業との関連をみると，１・２年生においては学業への自信や安心，探求が深まるほど，友人から得る自信や安心，関係への探究も強まることが示された。また，学業についての再考が強まる場合には，友人についての再考も強まることが示された。さらに，３・４年生においても，学業への自信や安心が友人から得る自信や安心につながることが示された。このことは，多様な人間関係を形成し，それに積極的に参加することが学習意欲に効果を及ぼすとした池田（2017）の指摘を支持するものである。しかし，３・４年生においては，学業への自信や安心，深い探究が高まっているときには，友人についての再考は弱まることが示された。さらに，友人から得る自信や安心が，学業についての再考を支えることも示された。このことは，３・４年生においては，すでに友人関係が確立し，安定していると考えられること，また確かな友人関係に支えられることで学業や学業を通した生き方を見つめられることなどが，その理由であると推測される。

最後に，白石ら（2005）においては，家族機能が大学１年生のアイデンティティ発達に影響することが示されたが，本研究では新たに１・２年生において，家族機能の高さが学業や友人への自信，探求の強さなどにも影響することが示された。つまり，入学期から中間期にかけ，新しい環境への移行が根づ

くまでの期間は，家族の支えが学業や友人関係にも影響し，アイデンティティ発達を支えていると推測される。

このように，本研究ではアイデンティティ発達と「学業」「友人」「家族機能」との関連を，学生サイクルの視点および「個」と「関係性」のアイデンティティ発達の視点から検討した。先行研究との比較により同様の結果が支持されたことや新たな知見が一部得られたという点では，研究の意義があったと考えられる。

今後は，対象者の数を増やし学生生活サイクルを３期に分けて分析すること，卒業期のアイデンティティ発達に影響する要因も含めて検討することなどが課題であると考えられる。

引用文献

安藤延男（1991）．座談会　キャンパスライフと学生相談の役割．現代のエスプリ，**293**，5-30.

Archer, S. L.（1989）. Gender differences in identity de velopment : Issues of process, domain and timing. *Journal of Adolescence*, **12**, 117-138.

Benson, Harris, & Rogers（1992）. Identity consequences of attachment to mothers and fathers among late adolescents. *Journal of Research on Adolescence,* **2**, 187-204.

Bosma, H. A.（1992）. Identity in adolescence : Managing commitments, In G. R., Adams, T. P. Gullotta, & R. Montemayor（Eds.）, *Advances in adolescent development : Vol. 4. Adolescent identity formation*（pp. 91-121）. Newbury Park, CA : Sage.

Crocetti, E., Rubini, M., & Meeuw, W.（2008）. Capturing the dynamics of identity formation in various ethnic groups : Development and validation of a three-demensional model. *Journal of Adolescence*, **31**, 207-222.

Erikson, E.H.（1950）. *Childhood and Society*. New York : W.W. Norton.（仁科弥生（訳）（1977, 1980）. 幼児期と社会１・２　みすず書房）

Erikson, E.H.（1959）. *Identity and the life cycle*. Selected papers. In *Psychological Issus*. Vol. 1. New York : International Universities Press.（小此木啓吾（訳）（1973）．自我同一性　誠信書房）

Grotevant, H. D., Thorbecke, W., & Meyer, M. L.（1982）. An entension of Marcia's Identity Status Interview into the interpersonal domain. *Journal of Youth and Adolescence*, **11**, 33-47.

畑野快・杉村和美（2014）．日本人大学生における日本版アイデンティティ・コミットメント・マネジメント尺度（Japanese version of the Utrecht-Management of Identity Commitment Scale ; U-MICSJ）の因子構造，信頼性，併存的妥当性の検討　青年心理学研究，**25**，125-136.

池田曜子（2017）．大学生の多様な友人関係が学習意欲へおよぼす影響　友人関係の機会獲得の観点から　日本発達心理学会第28回大会発表論文集，219.

Josselson, R.（1992）. *The space between us : Exploring the dimensions of human relationships*. San Francisco : Jossey-Bass.

Josselson, R.（1994）. Identity and relatedness in the life cycle. In H. A. Bosma, T. L. G. Graafsma, H. D. Grotevant, & D. J. de Levita（Eds.）, Identity and development : An interdisciplinary approach（pp. 81-102）. Thousand Oaks, CA : Sage.

金子俊子（1989）．青年期女子の親子・友人関係における心理的距離の研究　青年心理学研究，**3**，10-19.

加藤厚（1989）．大学生における同一性次元の発達に関する縦断的研究　心理学研究，**60**，184-187.

Kox, W., & Hustinx, P.（Eds.）（1990）. *Schalenboek WIL-project 1991. Deel 2 : Schriftelijke vragenlijst jongeren 15-24 jaar* [Scale-book WIL-project 1991. Part 2 : Written questionnaire adolescents ages 15-24]. Unpublished

manuscript, Utrecht University, Utrecht, The Netherlands.

Marcia, J. E. (1966). Development and validation of ego identity status. *Journal of Personality and Social Psychology,* **3**, 551-558.

Marcia, J. E. & Friedman, M. L. (1970). Ego identity status in college woman *Journal of Personality*, **38**, 249-263.

宮下一博（1998）．青年の集団活動への関わり及び友人関係とアイデンティティ発達との関連　千葉大学教育学部研究紀要，**46**（1），27-34.

岡本祐子（1997）．中年からのアイデンティティ発達の心理学　ナカニシヤ出版

白石尚大・岡本祐子（2005）．大学生の意欲低下傾向とアイデンティティ発達，家族機能の関連性　青年心理学研究，**17**，1-13.

白石尚大・岡本祐子（2006）．青年期のアイデンティティ発達と家族機能の関連性　広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要，**5**，52-66.

宗田直子・大澄紋子・岡本祐子（2011）．青年期のアイデンティティと家族機能，家族イメージとの関連　―「個」と「関係性」の視点から―　日本発達心理学会第22回発表論文集，110.

田中健夫（2007）．大学生の相談事例からみた修学上の行き詰まりの様相　青年心理学研究，**19**，33-50.

鑪幹八郎（1994）．日本的自我のアモルファス構造と対人関係　広島大学教育学部紀要　第一部（心理学），**43**，175-181.

鶴田和美（2002）．大学生とアイデンティティ形成の問題　臨床心理学，**2**（6），725-730.

鶴田和美・杉村和美・津田均・古橋忠晃・田中伸明・李明憙・加藤大樹・船津静代・神村静恵・小川豊昭・鈴木國文（2007）．名古屋大学における学修支援の現状と課題　名古屋大学学生相談総合センター紀要，**7**，3-13.

Watanabe, H., & Uchiyama, I. (2008). Assessing identities of university students in Japan and the United States. Psychologia, **51**, 61-75.

渡邊ひとみ・内山伊知郎（2011）．独身勤労女性のライフコースと生活領域からみたアイデンティティとの関連　発達心理学研究，**22**（2），189-199.